



12歳で映画作りをスタート。現在は、短編映画3本、長編2本、ドキュメンタリー制作やコマーシャル制作など、幅広いプロジェクトを手掛ける。



◀映画のほか、ミュージックビデオやCMなども手掛ける。日本人とアメリカ人のユニット『Layla Lane』のミュージックビデオ制作の現場にて。



▶AFI卒業制作の『ハーフェニス』。ハーフの幼い兄弟が日系アメリカ人強制収容所を脱出して白人の母親の住む町へ旅に出る、フィクション映画。



◀昨秋、『ハーフェニス』(HALF KENNETH)が全米映画監督協会から審査員特別賞を受賞。このほか同作品は、ショートショートフィルムフェスティバルで、日本部門最優秀短編賞など世界各地で十以上のアワードを受賞。

## Life in Los Angeles



ロサンゼルスで暮らす人々

# 「人と人との繋がり。 映画を通して伝えたい」

映画監督

## 落合 賢 (おちあい けん)

短編映画作品『ハーフェニス』。第二次世界大戦中の日系アメリカ人強制収容所を舞台に、ハーフの幼い兄弟が収容所を脱出して白人の母親の住む町へ旅に出る物語である。

昨秋、全米映画監督協会から審査員特別賞を受賞した同作品の監督・脚本を手掛けたのは、ハリウッドを拠点に活動する映画監督、落合賢さん。現在、『ハーフェニス』の長編版を執筆中だ。

「日系アメリカ人の方々が置かれた厳しい状況の中で、生きるために『ベストを尽くす』という姿勢を大切にしていたことを知りました。この作品を通して、日系アメリカ人の方々がポジティブな気持ちを持って強く生き抜いた姿を描きたかったです」

初めて映画を作ったのは、12歳の時。中学の文化祭の出しものでアクション映画を撮ったのが最初。「みんなで作るというアイデアが採用され、100ペー

ジほどもある長い脚本を書いたんです。タイトルは『僕らと3人の強盗たち』。3人の強盗が学校で人質をとって立てこもり、要求しているうちに、人質になった生徒が強盗をやっつけるという物語。映画を作るのが楽しかった反面、作る中でいろんなことがうまくいかなかった。どうやってうまくいくんだろう、という『挑戦』映画を作る大変さ、が自分にとって魅力的でした。映画作りって

一人ひとりの個性をどれだけ生かせるかっていう団体競技に少し似てますね」

02年に19歳で渡米。南カリフォルニア大学(USC)の映画学科で映画理論や歴史、制作を学び、その後、権威あるアメリカ映画協会付属大学院(AFI)で監督学科を専攻。ハリウッドの実践的な映画制作を身につけ、08年冬に卒業。学びの場では、いったん我流を捨て、一からフィルム制作の基礎を築いた。

現在、『ハーフェニス』の長編版の執筆を手掛けるほ

か、『サマー47』というタイトル。長編映画も執筆。短編映画を3本製作、ミュージックビデオやコマーシャル制作などのプロジェクトを同時進行中だ。アイデアを脚本に起こし、それを映像にしてきた落合さんにとって、映画を作ることは、呼吸するのと同じくらい自然なことだと話す。

「映画を撮ってきた中で最近気づいたのは、自分の中に普遍的なテーマがあること。それは『人と人との繋がり』。例えば、兄弟の絆、友達との絆、恋人同士の絆……。映画の始まりにはなかった絆が、映画の終わりには現れてくる。その絆があるから生きていけるんだとね。黒澤明監督が『創造とは記憶。その記憶の中から何を創造していくか』と話していました。私自身、家族や友達との絆に対する思いが強いですよね。その思いが形を変えて作品となる。映画を通して自分の思いを伝え続けていきたいです」